論文審査の要旨

報告番号	修第 1316 号	氏名	田中　伸
論文審査担当者	主査　三村洋美 副査　鈴木憲雄 副査　佐藤久弥		

(論文審査の要旨)

学位論文題目

「修士論文：中堅看護師の看護実践能力とレジリエンスおよびチームアプローチとの関連
－看護実践能力向上に向けての卒後看護師教育のあり方－」

急性期の大学病院に勤務する中堅看護師を対象とし，実践能力と逆境を克服する個人の適応力であるレジリエンス，チームメンバーが協働・連携するための組織的な支援活動であるチームアプローチとの関連及び相互の関係を明らかにした研究である。

まず、実践能力合計点を従属変数とした決定木分析を行った結果、第1分岐では，レジリエンス合計点の81点をカットオフとした分岐が示された．第2分岐～第3分岐におけるレジリエンスの寄与率は84.5%，次いで第4分岐～第5分岐における経験年数の寄与率は13.1%であった．最終分岐では，チームアプローチが2.4%の寄与率であった．

次に、実践能力とレジリエンスおよびチームアプローチの相関分析を行った結果、実践能力の合計点とレジリエンス（$\rho=0.690$），チームアプローチ（$\rho=0.381$）と有意な正相関（$p<0.001$）を示した。下位尺度の関連では，レジリエンスでは，【肯定的な看護への取り組み（$\rho=0.654$）】，【対人スキル（$\rho=0.458$）】の順に，チームアプローチでは，【チームへの貢献（$\rho=0.445$）】，【チームの機能（$\rho=0.381$）】の順に正相関が認めている。

最後に、実践能力を従属変数とした多変量解析を行い、実践能力に対して，年齢区分，部署経験，支援を受けた経験，レジリエンス，チームアプローチは，独立した関与因子であり，特に，レジリエンスと年齢の寄与率が高かいという結果を導いた。

実践能力には，年齢，部署経験，支援を受けた経験，レジリエンス，チームアプローチが関与しており，中でもレジリエンスが最も影響力が高く、実践能力を高めるための卒後看護師育成教育には，レジリエンスを高める支援体制が重要であることを明らかにした。本論文が明らかにした結果は、臨床看護において重要な知見であり、今後も継続した研究を遂行する価値は多大である。

以上より、田中伸氏より提出された、学位論文「修士論文　中堅看護師の看護実践能力とレジリエンスおよびチームアプローチとの関連　－看護実践能力向上に向けての卒後看護師教育のあり方－」は修士（保健医療学）の学位を授与するに値する論文であると認める。